

大学の内と外 理論と実践、 人々がまじりあう場所

今に至る先生のエピソードを
教えてください

小学生の頃から空を観察するのが好きでした。新聞に掲載されている天気図を毎日切り取り、ノートに貼って、自分が住む場所(三重県伊勢市)の天気予報をしていました。そのうち、全国の天気や週間予報もするようになっていました。専門的な知見から見れば、天気図一つで、そのような予測は難しいでしょうが、子どもなりに試行錯誤する毎日。実家に帰ると、その頃のノートが今も残っています。

私の研究領域は気象の先にある気象情報。気象だけでしたら、理学部の地球物理に進むという選択肢が一番の王道です。しかし、私の関心は気象と社会の関係にありました。また高校生の頃にCOP3(国連気候変動枠組条約第3回締約国会議、1997年)が開催。日本においても気象や気候が社会的に盛り上がっていたタイミングでした。そういう空気もあって、現在の分野に進もうと決めました。

Disaster Management

「研究室」は言葉どおり捉えれば、大学内にある私や学生たちの部屋を意味します。しかし、研究をする場所として捉えた場合、その意味は大きく広がります。防災の研究では、実践と理論の融合が不可欠です。机上の理論だけでは真に人の命を守ることはつながりません。実践を通じた理論の展開が必要です。「実践的に理論を生み、理論的に実践する」、この思想を踏まえたとき、研究室は大学の内だけでなく、外にも広がります。そのような研究室を通して、いろんな関係者が集まり、語り合う場所、それが私にとっての研究室です。そこでは、大学という境界を越えて、理論と実践、専門家と現場の人々がまじりあい、言葉を紡ぐ場所が日々生まれていきます。

Disaster Management

そこでは、大学という境界を越えて、理論と実践、専門家と現場の人々がまじりあい、言葉を紡ぐ場所が日々生まれていきます。



防災・危機管理コース 准教授

竹之内 健介

たけのうちけんすけ

京都大学工学研究科を修了後、気象庁本庁で気象予報技術の開発や天気予報業務に従事。その後、三重県庁で地方自治体の各種業務に従事する。京都大学防災研究所を経て、現在、香川大学創造工学部准教授として、「社会における気象情報の利活用」をテーマに研究を行う。全国各地で地域と連携し、風水害に備えた地域防災の取組を行うとともに、学校等において防災教育の実施や支援を行っている。博士(情報学、京都大学)を2015年に取得、気象予報士。

好きなことに確固たる理由はないような気がします

天気は大好きですが、道も好きです。有名観光地でもなく、撮影スポットでもなく、人々を通る何気ない道。

でもそこには文化や歴史、人々の生活が感じられる。そんな道が好きで、時間のあった学生時代はいろんな地域を旅したりしました。

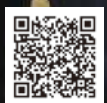
今まで、天気と道の関係について、考えたことはありませんでしたが、もしかすると、人々が生活する空間という点で共通するところはあるかもしれません。天気を取り巻く空間、道を取り巻く空間、そこにははっきりと人々の営みがある。そういった空間を感じとるのが好きなかもしれません。

子ども頃に観察していた空が、その最初。でも結局、好きな理由を分析しても仕方ないでしょう。みなさん、結局好きなものは好きでしょうから笑

フィールドワーク中心のアクションリサーチが基盤

私の研究は、フィールドの人たちと一緒にやるスタイルが基本です。研究方法としては、アクションリサーチと言ったりもします。現場の地域の方々や学校の先生や子どもたちと一緒に、防災について一緒に考え、行動します。

いろんなフィールドに行く機会がありますが、地域の方から「〇〇くんは、がんばってるよ」と言われると、自分のことのようにうれしくなります。それは、地域の方が学生の顔と名前を覚え、頼りにし、活動が信頼されている証拠。研究を通じて、そんな人々の交流が各地で生まれるのが理想です。



教員紹介



研究室紹介